

第7回：和紙の実力

和紙が無形文化遺産に

ちょうど、この原稿を書いている最中にニュースが飛び込んできました。ユネスコが「和紙 日本の手漉(てすき)和紙技術」を無形文化遺産に登録することを発表しました。先の「和食」に続いての快挙で、世界が日本の文化や伝統について、興味や評価の賛辞をいただいている証ともいえます。

解説◎山本康彦
取材協力◎株式会社ワイズ

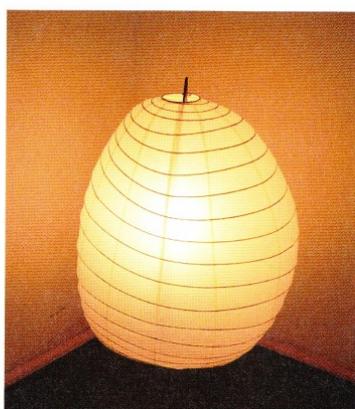
和紙の原料には、楮(こうぞ)や三桠(みまた)、雁皮(がんび)などのほか、バイナップルや竹、木材パルプなどがあり、原料の違いによって紙の風合いも異なりますが、今回登録された3つの和紙(島根県)と本美濃紙(岐阜県)、細川紙(埼玉県)は全て、楮だけを原料としています。しかし、国内の楮の生産者は減少しているそうです。楮の栽培はあまり手間がかかるないが、収入が他の業種に比較して非常に少ないことが要因のひとつだそうです。良い和紙を作るには、水も重要で、楮を洗い流す作業では「清らかな水」が必要となるそうです。つぎに家づくりに欠かせない和紙の特長をお伝えしたいと思います。

和紙の材料



現代の家とは建物全体の断熱、機密性が違う為、一概には言えませんが、少し科学的に分析してみましょう。

データを見ると今のアルミサッシ窓(シングルガラス)よりも、障子や襖の方が熱を伝えにくい。つまり、より断熱性能の高い材料なのです。障子に使用される和紙の繊維層の気孔が熱を伝えにくくするため、優れた断熱性を發揮していると考えられます。



湿度調整

障子や襖の優れた機能の多くは、和紙から生まれるもので、和紙は天然素材から作られた、きわめて粗い繊維の層で、繊維が絡み合った間には無数のすき間があり、そのすき間には空気が入っています。しかも、和紙の気孔は湿度に合わせて湿気をたぐわえたり、放したりを繰り返し、部屋の急激な湿度変化を抑えるのにも役立っています。このような機能を有する和紙貼りの障子や襖は、夏と冬の気温が大きく、湿度の高い日本に非常に適した建具といえます。

山本康彦の

自然のチカラ、住まいの素材 本当の建築塾

昨今、家のづくりは、和室がない家が多く、障子や襖のない家が増えていましたが、本来、障子や襖は、古くから日本の家づくりには欠かせない建具として使われています。古来、和紙を貼った障子か襖(ふすま)、そして木戸(雨戸など)しかありません。私達が想像すると、とても酷い住宅環境だと思いますが、それらの住まいは本当に寒く、住空間として悪い家だったのでしょうか?

窓との隙間が多いカーテンやブラインドと違い、障子や襖は隙間が少ないので、暖房時には、夜間の窓からのお放射冷却を防ぎ、局部的に窓だけが他と比べて極端に低温となる冷輻射も低減されます。室内側を熱伝導率の低い木製建具とすると、アルミサッシの二重窓よりも熱損失の面で有利かと思われます。

す。他の断熱効果の実験では、厚手のカーテンとレースの組み合わせより、障子1枚の方が熱を伝えにくくことが分かっています。

熱還流率比較 ※数値が小さいほど断熱性に優れています。単位「W/m²・K」

●襖 K=3.0

●アルミサッシ(シングルガラス) K=5.9

●アルミサッシ(ペアガラス)

●障子 K=4.8

●木戸 K=12.5

私共、Y'sの家づくりでは、湿気のたまり易い収納や物入れの扉は、あえて木製にはしないで和紙貼りの扉を造り設置します。扉だけでなく収納内部の壁や天井にも和紙貼りを施し、内部の湿気を外へ逃がしながら、和紙の持つ換気と浄化性能にも効果を期待しています。

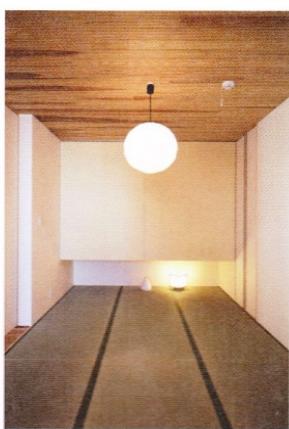


遮光性、反射性

障子は、窓から差し込む日射を柔らかく拡散させることで、自然な明るさを作りだし、心地よさを与えてくれます。それも和紙のもつ気孔性能が生きています。この気孔がレンズのような働きをして、障子に入ってくる光を拡散するため、光線の透過率は40～50%程度。ガラス窓の透過率は約90%であるのに比べて半分程度といえます。まぶしさを取り除きながら、程よい明るさを残します。つまり、和紙を通った光は半分だけ透過し、さらに拡散されるので、非常に柔らかい光になり人の情感に優しさを与えてくれているのでしょう。

また、冷房時には日射による負荷がかなりの部分を占めているので、省エネエネルギー

効果も期待でき、日々の光熱費にも影響する素材なのです。光を拡散する事は重要で、各方向に拡散して部屋全体を均等に明るくするだけでなく、窓付近だけ明るく、奥は薄暗いという強いコントラストをなくすこともつながります。



現代の家づくりでの障子と襖

障子や襖は、古くから部屋同士を仕切る壁の役割にも使われました。壁と違い自由に取り外しができるため、部屋の間仕切りとして使うことで部屋の大きさを柔軟に変えることができる建具ともいえます。個室化が普通になってしまった感のある現代の家づくりでは、縁側と部屋の仕切りである障子がなく、間仕切りは壁に、ドアや扉などの建具は工業製品である合板を使用した新建材が多いのが現状です。これほど自然の恩恵と人々の知恵と技で、世界的にも評価されている、高性能な和紙を障子や襖、または壁や天井などの内装にも利用しない手はありません。

障子や襖と聞くと、すぐに「和風」を連想される方が多いと思いますが、勿論「和」で

間違いはありませんが、障子などは、そのデザインを伝統的なものに限定せず、個性を生かしたデザインにする事も可能です。そうする事で洋間に障子や襖を設け、モダンな家具とも相性が合うのも障子や襖の特性により、断熱性、湿度調整などの多機能な性能のほか、光にも作用し、デザインも柔軟に対応出来る優れたインテリアでもあります。これでは本来和紙のもつ性能の恩恵は受けられません。障子紙を張り替える事は、さほど難しい作業ではありません。

小さいお子様がおられるご家庭では、「障子紙が破られる」との心配から、プラスチック製の障子紙を好まれる方もいらっしゃいますが、これでは本来和紙のもつ性能の恩恵は受けられません。障子紙を張り替える事で、年末のこの時期には思いつきりお子さんに障子を指で突き、破つて頂いてご家族皆さんで和紙(障子紙)を貼つて下さい。年に一度、1日、張替える作業で、残りの日常での快適でお財布にも優しい和紙の恩恵が受けられます。

和室を洋風に使う為に障子を外してしまった方や、障子や襖のある和室をビニールクロス貼りの洋間にリノベーションする前に、もう一度、利用を考えて見ては如何でしょうか?

最後に、2015年の『湘南村』では、和紙を題材としたワークショップの開催を予定しておりますので、ぜひご家族皆様でご参加下さい。

解説／山本康彦©1968年神奈川県鎌倉市生まれ。18歳から職人として30年近く湘南の地で家づくりに携わる。土を利用しての建材、版築製品の研究・開発、販売などに従事。一級建築士だけではなく、古民家鑑定士などの資格も30以上持っており、伝統的な構法や建材にも造詣が深い。近代の建材(新規材)や工法の矛盾や実害を肌で感じ、人が住む家というものを原点から見つめ直す。エコブームに流されないパッシブで地域循環型の家づくりをめざし、未だにすべては解説されていない伝統的な工法や素材について研究や開発に余念がない。

取材協力

株式会社ワイズ

〒253-0021 神奈川県茅ヶ崎市浜竹3-4-64
TEL: 0467-88-3903 FAX: 0467-88-3907
URL: <http://www.ys-no1.co.jp>
mail: ys-no1@ys-no1.co.jp

